浄土宗 Q&A②

仏事などの素朴なギモンにお答え！

お数珠とお焼香について

イラスト・遠藤由貴子

Q 浄土宗のお数珠の使い方とかけ方を教えてください

A お数珠は宗派を問わず誰でも使用する身近な仏具です。基本的には小さな珠に糸などを通して輪状にした形状をしています。字のとおり、「数・える珠」です。浄土宗ではお念仏を何回となえたか数えるために用います。

今でこそ仏教といえばお数珠はつきものというイメージがありますが、かつては違いました。もともとはヒンドゥー教の司祭がお祈りのときに使っていたようで、インドの神さまの図像にはお数珠を持っている姿が見受けられます。5世紀ごろに作られた観音菩薩像がお数珠を持っていることから、日本ではそのころから用いられるようになったようです。

お数珠の形や材料はさまざまですが、108の珠が連なる百八数珠が基本の形で、これが変形して、現代では4分の1にあたる27顆（か）のお数珠を所持している人が多く見受けられます。

浄土宗では一般に、輪を二つ連ねた二連の数珠「日課数珠」を用います。

これは法然上人の弟子の阿波介（あわのすけ）が、より多くのお念仏を数えられるようにと二つの数珠を使うことを考案、これがもとになって現在の形になったとされています。

日課数珠でお念仏を数えるときは同じ大きさの珠が連続して連なっている方の輪を一遍ごとに繰っていき、一周したら小玉が間にある方の輪を一つ繰り、いくつ珠が繰り進んだかで回数を割り出すことができます。一般的な日課数珠では珠の数にもよりますが3万～6万遍のお念仏を数えることができます。

浄土宗のお数珠の持ち方は、イラストのように合掌しているときは二つの輪を人差し指と親指の間に掛け、房などは胸側に垂らします。お焼香のときなど、合掌していないときには左手首にかけておきましょう。

御忌の意味

「お念仏をとなえれば、誰もが極楽浄土に往生できる」
この教えを掲げ浄土宗を開き、生涯をかけて説き広められた
法然上人（一一三三-一二一二）のご遺徳を偲ぶ法要を御忌（御忌会）といいます。
「御忌」という言葉は、もともと天皇陛下・皇后陛下などの貴人や、高僧の
年忌法要の尊称として用いられていました。一五二四年、後柏原天皇が
「法然上人の年忌に御忌の名称を用い、七日間の法要を勤めよ」と、
総本山知恩院に詔勅を下されたことにより、「御忌」は法然上人の
年忌法要として定着し、浄土宗寺院で広く勤められるようになりました。
明治十年に知恩院が日程を四月に変更してから、
他の大本山や一般寺院でも、一月二五日のご命日とは
時期を異にして勤めるところが多くなっています。
法然上人は、「念仏の声するところすべてが私の遺跡である」と
ご遺言なさっています。
私たちそれぞれが極楽への往生を願い
一心にお念仏をとなえること、
それが、そのまま上人への最上の報恩にもなるのです。

Q 法事やお葬式のときにするお焼香の意味と回数を教えてください

A

お通夜、お葬儀、ご法事にうかがったときにするお焼香。もともとお香は古代インドで匂い消しのために用いられていました。今でも身心を清らかにし、芳しい香りで心を落ち着つかせる意味でも用いられています。さらにお香を焚いて手向けることは献香ともいい、仏さまや亡くなった方への最上のお供物とされています。

お焼香の作法やお香をくべる回数は宗派によってさまざまで、解釈もそれぞれです。

浄土宗でのお作法は、右手の親指、人差し指、中指の三指でお香を適量つまみ、左手を下から添えて眉間の高さあたりまでいただきます。阿弥陀さま、亡き人への想いをいたし、炉の炭のうえにくべます。浄土宗では厳密な回数は定めていませんが、回数により次のような意味があります。

- 一回…一心に供養する
- 二回…行いを正し、心を静める
- 三回…むさぼり、いかり、おろかさの三つの煩悩を消す

※大勢の方が参列している場合は、一回とするのがいいでしょう。またそのように案内される場合があります。

お焼香の後は合掌してお念仏を十遍おとなえしましょう。

浄土宗以外の宗派のお葬儀や法事などに参列する場合でも、そのお宅の宗派の作法に合わせる必要はありません。作法を気にしすぎると、ご供養したい方への気持ちが散漫になってしまいます。なによりも亡き人への気持ちを込めてお焼香をすることが大切です。